

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別換取認許第三五二號  
昭和二十七年六月廿五日印刷  
昭和二十七年七月一日發行

第十八卷 第七號

# 浄土

## 七月號

大乘の歩み 眞野正順  
うら盆の頃 佐藤賢順

戯曲の時雨 吉田絃二郎  
阿彌陀經の話 藤井實應

1952

7

## 二世と佛教

今次大戦たけなわのところ、アメリカ本土の一軍事地區に二世部隊が編成された。そこへ士官學校出たてのホヤホヤの少尉が任官して來たのだが、みるとみんな黄色い顔の兵隊ばかりなので、こんな部隊はごめんこうむりたいと、早速先任の上官に轉屬願いを申し出た。上官の曰く、「君は民主主義を知っているか。それは國籍も階級も人種をも超越したものだ。成程、君が着任した小隊の兵隊は白人ではない。然し彼等といえどすべてアメリカの市民であり、アメリカのために戦う兵隊なのだ。たゞちがつているのは彼等が佛教徒だということ丈けなのだ。君の轉屬は許可しない」

これは、アメリカの二世部隊で、イタリアで赫々たる武功をたて、アメリカ軍隊の中で最も多くの賞状を得た四二二部隊の物語りを映畫化した。その始めに出て來るシーンである。その他もう一つ、野戦で重傷でたおれた二世兵士の手には珠數がかけられているシーンもあつた。

アメリカ人によつて、アメリカで作られた映畫に、二つの佛數のシーンの出て來たことは、アメリカ人の考える日本人の宗教觀を最もよく表現したものであり、此點深く味合ふべきであると共に、このように考えられている佛教の現實の姿について深く反省したいものである。(竹中)

## 目次

大乘の歩み……………眞野正順(1)

阿彌陀經の話……………藤井實應(14)

吉水……………東山未知夫(8)

讃岐法然寺を訪ねて……………安居香山(22)

うら盆風景……………(22)

時事用語……………(5)

サーマルの日本人村……………白井憲成(17)

うら盆の頃……………佐藤賢順(6)

香物語……………竹中信常(24)

欣求淨土……………須藤隆仙(11)

鬼子……………水野善朝(12)

所謂正義……………河野達雄(13)

京の時雨……………吉田絃二郎(27)



# 大乘の歩み

(一)

眞野 正順

先達、ある外國人が、日本を發つて行く時、つくづく言つた言葉が、耳に残つています。

「あの終戦の頃から見ると、確かに物質的には復興して來たが、残念ながら精神の方は、あの頃の儘である。昔の日本はもう歸つて來ないだろう。」

そう云つて、去つて行きましたが、この言葉は、おそらく、今の心ある人々の胸に、何か響くものがある、と思ひます。

(1) 確かに、あの頃から我々は立ち直つて來ました。外面的には、日一日と昔の繁榮を取戻してゆくように見えます。然し、我々の胸に嘗てあつたあの心持は歸つて來るでしょうか。「正直者はバカを見る」といふ。その正直者

だけが幸福になれる日は、何日歸つてくるのであるか。  
——人々は心の何處かで待つています。「もう少し物質が順調になれば、吾々の良心も歸つてくるだろう」と。  
果してそうでありましょうか。物質の傷痕は癒すことが出来るが、精神の受けた傷痕は容易に癒えるものではない。

實を云へば、私共が、受けている精神の傷は、いま考へているよりも、更に深いものでありまして、この敗戦によつて、初めて出來たといふものではない。久しい間積りに積つたものでありまして、その淵源は、遠く明治開國に遡るのであります。吾々が西洋文化を取入れた。あの出發の日から、私の内部に、秘かに萌しそめた病氣

であつて、それが、敗戦と共に、一時に暴露したのに過ぎないのであります。

明治の開國は、申す迄もなく、優れた西洋文化に、急速に追いつこうとする、後進國の慌しい努力でありました。幸いにして、わが有爲なる先覺の努力によりまして吾々は之に成功しました。然し、この目覺しい成功の蔭に、すでに破綻の種が、秘かに播かれていたのです。なぜならば、文化といふものは、一つの「生き物」でありまして、その根には、必ずそれを支えている生きた精神があります。それを見ずに、たゞ文化だけを取つて來るといふ事は出来ません。丁度、根の無い枝を植える様なもので、一時は良くてもすぐ枯れてしまふ。西洋の文化もそうです。是を支える精神を持て來ねばなりません。ところが、この用意が我々に缺けていたのです。

一體、西洋の科學文明といふものは、人類歴史の間、かつてない、恐ろしい力を持つたものでありまして、後進民族で、一度でもこれに觸れたら最後、もうこの愕くべき便利の味からは離れる事は出来ません。鵜についた鳥も同様です。然も、その一方に於て、夫のもつ思想精

神によつて、今迄の舊い民族の生活や精神をどしどし破壤して、忽ち民族を腑抜の様なものにしてしまふ。こんな恐ろしいものは無いのです。そこで是に對し、何とか自分を守り通そうとする後進民族の苦しい足掻に、共通して次の二つが現はれました。

一つは、この恐るべき西洋文化に對し、自分達過去の民族精神に立歸り之を足場として強く反撥して行かうとするのです。所謂、國粹主義と云はれるのが夫であります。然しもとよりたゞ過去の中に閉ぢ籠つただけでは、強大な西洋文化に立向ふ事は出来ません。そこで抵抗に必要なだけの科學技術、たとへば、武器だとか、生産機械だとか云ふものは、進んで取入れ、それを自分達の精神で運営して行かうとした。つまり、敵の武器を奪つて自分を守り、あはよくば、これを自分達の傳統的精神によつて作り直し、獨特の文化を打建て、行こうと云ふのであります。

明治の初め、我國の先覺がとつた態度——大和魂でもつて西洋の才能を運営して行かうとする——所謂「和魂洋才」の主張はまたこの一種であります。この考は一應尤

もでありますが、然し、強烈な西洋文明の前にやがて崩れゆく一場の夢に過ぎなかつたのであります。現代の科學文明は、決してそんな生易しいものではありません。夫を産み出した獨特の西洋精神と堅く結びついてゐるのであります。夫を本當に自分の物としようとするならばやがて、その精神をも次第に受け入れて行かねばなりません。いきなり木に竹を繼ぐ様な譯には行かないのであります。

國粹主義は、譬へて云へば、びつくりした鶏なぞが草叢に首をつつ込むやうに、たゞ過去に首をつつ込んで、現在を忘れようとするもので、云はゞ本能的な一つの反動でありまして、民族が危險に晒されると、一時的には強く勃興しますが、長續きする事が出来ない。文化を支配する本當の理性的な内容をもつていないからです。夫故、西洋文化の性質も、本當には、飲込む事が出来ないので、段々、自分を狭く閉じ世界の潮流から孤立して、果ては、「一人善がりの」傲慢に陥つて行く。吾々をしてこの大戰の慘禍に陥入れた、あの偏狹な日本主義はまたこゝから出たものであります。

も一つの道は、之とは反對に（舊い生活をかなぐり捨て）全面的に、新しい西洋文化を採り入れて夫に依て、自己の發展を計らうとする、——所謂文明開化「開化主義」と名けられるものです。之は、前と違つて甚だ理性的でありまして、廣く世界の歩みと共に發展して行こうとする進歩主義であります。

近世の日本は、實に、この開化主義の目覺しいチャンピオンであります。かつて歐羅巴人以外で、西洋文化を採用して、かくも急速に、又見事に、成功を納めたものは無いと、言はれております。然し残念ながらこの成功は一時的のものだつたのです。

開化主義はこれを譬へて申しますと、急流の中で馬を乗換へるといふか、今迄永い間、やつて來た自分達の生活と精神とを、急に振り捨て、全く縁もゆかりもなかつた西洋文明に、そつくり乗換へようとする。その危ない藝當が旨く取り運んで呉れ、ばよい。一度、踏み外せば、眞逆様に急流の中に顛落し押流されてしまふ。歴史を見ましても、こんな危ない藝當を無事に遣り遂げたものは、めつたに無い。一時は成功を占めた様に見えまし

ても、やがて百年も経たぬ内に、大抵はひつくり返つて仕舞ふ。今回の眞珠灣攻撃は、明治開國以來七十三年目であります。

夫れだけではない。この開化主義を押進めている力はいもと／＼物質的なものであります。前の國粹主義は、ともに角にも、一つの精神が筋に入つた運動でありましたが、之は西洋文明の利益に動かされて、功利的な打算から出發している物質的なものです。夫故、何時も模倣をするばかりで、内からの創造を伴はない。是に依て、機械的な生産物の嵩だけは増えて來ますが、幾ら經つても模倣的な「寄せ集めの文化」でありまして、本當に文化を作り出してゆく自信と云ふものがない。やゝもすると洋服を着た道化役者の様なものになつてしまふ。

以上二つの主義は、西洋文明の侵入を受けた所では、どこでも、大なり小なり必ず起つております。然も、この兩者は互に相戦ふ。戦いながら益々民族の精神を破壊してゆく。然も兩者ともその意味する所は別であります。が、西洋文明の物質的方面にだけ、眼をつける事は、同様でありますから、結局、その邦は、いよ／＼物質に傾き、精神はいよ／＼空っぽになつてゆくのであります。

こういうものは、現代の西洋文化の外側に、自ずと生み出されて來るものでありまして、地球上到るところ、夥しい數を以て現はれてきています。近頃の日本人は、どうも上海や香港あたりの浮浪人と、大分よく似て來たという聲が、あちこちで聞えますが、それは外觀だけでなく、内味までもそうなりつゝある事は、注目せねばなりません。彼等は、何れも、その民族的な精神的基盤から急に切り離された根無草で、いつも、物欲しそうに、西洋文化の周りに群り立ち、そして先きを争つて、利益あるもの權力あるものに、とびついて行く。従つていつも大勢順應であります。國粹主義が増大してファツショの熱流が沸き上つてくれば、忽ちそれに引づられてゆくかと思へば、また世界革命の理論が鮮やかに展開されると、忽ちその中に捲きこまれる。本能と觀念のまに／＼目の前にある社會權力に引かれて押流されてゆく。

こういうものが、世界いたる所、現代西洋文明の外側に夥しく産み出されて來たのでありますが、残念ながらわが日本人も、まさに其處に顛落せんとする一步手前にあるのであります。

# 時事用語

## スポンサー

商業放送番組の廣告主、放送會社で作つた番組を買つたり、一定の放送時間を買つてスポンサーの手で番組を作つて提供する場合もある。〇〇會社提供の番組というのが、これで、商業放送事業では最も大切な要素である。

## ヴォイス・オブ・アメリカ

V・O・Aとも略稱し、米國務省が自らの手で行つてゐる世界各國向けの海外放送であり、現在一日に三十五萬語、四十五種の言葉で放送しており、昨年九月から日本向けの日本語放送も開始された。

## キャップ

キャップテンの略で、一般では一群の長をいう。共産黨で使われる場合にはそれぞれの組織または

機關の責任者のことをいう。

## オルグ

オルガナイザー（組織活動者）

の略で、特に共産黨の組織活動を専門にやる黨員。その任務は各級黨機關の決定を具體化して斗争を組織し、黨の上級下級の間や各大家團體内のグループと有機的連絡をはかり、組織を擴大強化する。

## テンション

緊張と譯され、人間の生理的・

社會的な欲求がなんらかの障害でさまたげられて満足されない状態

すなわち「欲求不満」によつて生

みだされる状態。ここからしばし

ばその障害を興えたと見なされる

相手に對して、物理的、言語的、

精神的な攻撃が反應として現れて

くる。テンションは生理的個人的

な場合にもあるが、現代社會にお

いては社會集團のそれが主要なも

ので、たとえば國家間では戦争の

條件ともなる。

## サスペンス

映畫等で、ある不可解な暗示伏

線が與えられることによつて見物

線が、その後の筋の發展に不安、疑

惑好奇心などをおぼえ緊張して種

々の想像をたくましくするように

計畫する技巧。たとえば「サンセ

ット大通り」「マルダの鷹」のサス

ペンスはよいとか、ヒッチコック

はサスペンスが巧いとかいう。映

畫だけでなく他にも使われてい

る。

## アレルギー

結核にかゝると以前陰性であつ

たツベリクリン反應が陽性にな

る。又、BCGの接種でも陽轉す

る。すべて、このように、ある物

質に對して、人體が起す反應が從

來と變つた状態をアレルギーとい

い、この状態を起すことを感作す

るといふ。以上はアレルギー本來

の意味であるが、ある物質に對し

て、ふつうの人よりも過敏で、病

變を起す場合には、この言葉が廣

く用いられ、感作の不明なことが

## ひもつき融資

金融機關が融資をする場合資金の用途を監視したり、あるいは資金の反済に條件をつけて融資すること。現代のような不況時に著しく現われてきた。折角融資してもそれがその會社の人件費や赤字の補填に食いつぶされ關係産業への未拂を防ぐためである。

## 水すまし

近來自動車がふえ、都心等では駐車する所がない時、ぐる／＼近くを水すましのようによろこぶこと、

## 時事用語



# うら盆の頃

佐藤賢順

七月十三日から十五日まではうら盆である。十三日の夕方、門口で迎え火を焚いて、お墓へお詣りして、提灯をともしして道案内をして、先祖の御精霊様を家の佛壇までおつれ申す。新佛でもある家は初めてのお歸りだから、なお更のこと、心を込めてお迎えにゆく。

佛壇には眞菰の蓆を敷いて、兩側に笹を立て、少し色ずいたほおずきなどを編み込んだ草の幕を垂らし、茄子や胡瓜のお馬を供え、水向けのためにみそはぎの莖を整える。すべて佛壇がそのまゝ水邊か野邊の心持に飾るのである。くさぐさの供物が供えられ、すがすがしく百合や蓮など夏の花が供えられる。夜ともなれば、大きな盆燈籠に火が點されて、御先祖の逗留の二晩を賑やかに明るくすることはいうまでもない。

三日二晩いろいろと御馳走して、十五日の日暮には、送り火を焚いて、歸りの道を明るく照して、お送り申す。門口で送り放しにしないで、お迎えの時と同じように、また提灯に火を入れて、一家揃つて、お墓までお送りするのが例である。

ほんとうは佛壇の外にもう一箇所、縁先か窓邊に精霊棚を作つて御先祖とは別に、迎え手もなく行き所もない一切精霊を迎えて、手

厚い供養をするのが、佛道の深い精神に添うたことで、今でもそうやつている所がある。お精霊様は川邊や水のほとりから来て、そこから歸るから、歸りには茄子や胡瓜のお馬と一しよに水邊へお送りする。

招かれるはずの家があつても、後継ぎや親戚たちが心がけが悪くて、一向に迎え手のきてくれないお精霊様は、さぞ肩身が狭かろう。十三日の迎えをついうつかりして、十四日にあたふたとお墓へ馳せつけるなど、まだよい方である。

十四、十五は棚經である。お精霊様の歸つたところを、お寺の和尚が家々を廻つて回向をする。ところが何分二日間では廻りかねるので、棚經が十六日になるときもある。そういう時は豫めお精霊様を送るのを一日延ばしておいてくれと頼んでおくのであるが、これは和尚の勝手である。

勝手といえはお盆にも勝手盆というのがあつて、七月十三日には農家は忙しくて、とても佛様のおもてなしがしてられない。佛様にかこつけて自分達もゆつくり遊びたい、というのには農家の閑になつた頃がよいではないかということで、一ト月送りでなく、八月

の末になつて村中都合のよい頃を相談して、お盆をつとめる。村中の勝手で毎年日取りが違ふから、勝手盆である。

うら盆は盂蘭盆で梵語の音譯、倒さにつるされている者の苦しみを救うという意味であるが、うら、おもての對向を連想させて、うらがある以上、必ずおもてがなければなるまいというので、おもて盆をつとめる所がある。それは二十四日の地藏盆の頃で、この時まではいろいろとお盆の行事が続くのである。

私の寺は京濱國道に添つていて、銀座までバスで十五分の距離にある「都内」であるが、近くに寺の多いせいでもあるが、お盆の頃になると騒然としてくる。それは賑やかという程度を越して騒然たる趣を呈してくる。お互に驅り立てられるのである。ふだん横の現實ばかりに埋没していて、縦の歴史をすつかり忘れてゐるわれわれが急に周圍に唆かされて、縦の歴史を覗くのである。人生というものが商賣や交際や借金や税金の横の現實ばかりではない、これに祖先の血液や文化財や私というものゝ行末や——そういう縦の關係が交叉しているということを、お盆の頃になつて、その人その人なりの感じ方で、ふと氣づくのである。私を包むもの、私をあらしめてゐるもの、私を超えたものゝことを考えるのである。都會であらうと農村であらうと、それは問わない。教養ある知識人も、いわゆる匹夫野人と同じように、この私を包むものゝ世界を覗くことを拒むことができない。

理學博士で或る研究所の所長をしている人が檀家にある。横濱市といつても在方に住んでいる人で、その邊はつい近頃まで一ト月送

りでお盆をつとめていた所である。しかるに菩提所であるこの寺のお盆はもちろん陽曆である。土地の習わしに従つて佛壇に精靈棚を飾るのは八月になつてしまふが、もう住んでいた東京都内のしきたりで寺詣りは七月のお盆にする。するとお迎えしたお精靈様は一カ月間道草を食つてゐることになる。この人にはそれが氣になつてたまらなかつたらしい。科學者であるから、お精靈様のことも、割りきれないことはやはり氣になるものとみえる。ところが新市街の擴がるとともに習慣も新しくなつて、その土地も漸く陽曆でお盆をつとめることになつた。その年のお盆にこの科學者は晴ればれとした顔で寺に詣で、

「やつとこれで安心しました。御先祖も道草を食わずに、まつすぐ家へ歸つてくれます。」

とほつとした様子で言うのである。七分三分か八分二分か、八分の冗談に二分の本氣を包んで、笑に紛らせるのである。

そこでちよつとびり理屈を書かせて頂くが、お盆の行事を見るにつけても考えることは、宗教は表現、表徴、形像の世界であつて、論議の世界ではないということである。今では誰もまさかお精靈様が提灯の火に導かれて家へきて、茄子のお馬に乗つて水邊から歸るとは考えていまゐない。これは八分の冗談であらう。けれどもこうした表徴を用いなければ宗教の世界は表現できないのである。それは音によつて音樂の世界を、數字によつて數學的眞理を表わすのと同じことである。



# 吉水 (二)

東山未知夫

時國は、何か一脈の曙光を求めたかのように、ほつと息をついた。

朝もやが、靜かに庭の置石をしめらしている。

「おめ覺めになりましたでござりまするか。」

奥方の聲に、時國は、はつと我れにかえり、その柔和な笑顔を奥方の方に向けた。今までの眉根の曇りは、跡形もなく消されている。

「あゝ、お早よう。ひどいもやじやのう。して、そなたは少し上氣しているようじゃが……」

「ええそれが、昨夜、不思議な夢を見ましたのでございます。あまりにはつきりとした夢なので、今でも心が……。」

「して、どんな夢じゃつた。」

「あの……、剃刀が、あたしの體の中へ、すうつとはいつた夢でございます。何だか頭の先からお腹なかの中まで、眞直ぐに何か走つたような氣が致しました。」

「それはよい夢ぢや。きつとそれは、そなたが、今まで永い間欲しいと思つていた男の子を妊んだしるしぢや。」

時國の奥方は、秦氏からこの漆間家へ嫁して來ていた。もう結婚

して久しくなるが、二人の間には未だ嫡子は恵まれないまゝであつた。當時の弓矢を取る家柄にとつては、嫡出男子のないことは、一家の存續にも關わる重大事だつた。時國も奥方も、互に口には出さなかつたけれども、夫々心の裡では、常にこの一事に思いわずらつていたのである。時國は、奥方の、常に詫び入るようなまなざしを見るにつけ、この一事を口に出すことは、彼女の心を苦しめることになると思ひ、決して嫡子を欲しいなどとは口にしなかつた。

しかし、夫の心は、妻が最もよく知つてゐる。時國は口には言わないけれども、彼れが嫡子の出生を望んでゐることは、奥方には掌の物を見るようにはつきりと判つてゐる。時國も又、奥方が、時々觀音様へお詣りするもの、この一事のためであることを知つてゐた。そして、そんなにまでして嫡子の出生を願う妻をいじらしく思つてゐたのである。夫も妻も互に同じ一事を心から願つてゐた。そして互に相手に向つてそのことを口にしなかつたのである。それを口にすれば、互に他を苦しめ合うことになるから……。

ところが、今朝は狀況が一變した。互いに心の中に秘めていたこ

とが、吉兆となつてそのはけ口を見出したのである。双方とも今までの願いを口に出したのである。しかも互に他を苦しめることなく互に他を喜ばせるような仕方である……。

「わしは、今まで世の中の出来事を實力で——兵力で——治めようとして来た。しかし、人間は力だけでは心服するものではない。」時國は、じつと奥方の顔を見つめながら、語るのである。

「今は、世の中はすべて窮乏のどん底にある。誰れもが皆、貧しいのだ。私が武力を以て強盗どもを撃つても、それは反つて強盗どもの反抗心を煽るばかりだ。」

時國の顔は、何ものかに悪かれたかのように、兩眼を鋭くひきつらせている。奥方は、呆氣にとられたように、時國の口許を見上げている。その時國の唇から、また言葉が洩れて出る。

「強盗も人間なのだ。腕力の強い、そして心の弱い人間なのだ。

彼等のその弱い心に、何ものかを與えてやらねばならない。彼等も人間なのだから、お互いに信じ合うことの出来る楽しい世の中をきつと心から求めているにちがいないのだ。そなたの妊んだ子が男の子であるならば、わしは此の押領使の職を繼がせたくない。それよりも、その子をお互に信じ合うことの出来る楽しい世の中に生きるように、どんな人間にもしつかりとした強い『心』を與えるような人にしたいと思うのだ。」

奥方は、時國の言葉を一語一語噛みしめるように聞いている。

「お口すゝぎの水を……」

女中の差出した手桶をもつて、時國は縁先の臺石の方に歩いて行つ

た。一掬、二掬、初夏の水は、ひいやりとした冷たさで時國の顔に觸れては、やがて手の指の間から雫となつて臺石をぬらしながら、苔の中へと浸み込んで行く。臺石の横にくつついて生え出ている、のきしのぶも、時々水滴を浴びて、靜かにゆれている。

「そなたは、暫らく休むがよからう。」

女中から受取つた手拭をさゝげながら時國の後に立つている奥方向つて、彼れは柔らかく云つた。

「でも、まだ何も變つたことがございませぬ。私には私のなすべき務めがございます。このまゝ私が休めば、女中達の仕事が多くなつて、氣の毒でございます。勿體ないことでございます。」

「そなたの心遣いは、わたしもよく判つてゐる。しかし、これからは、そなた一人の體ではないのだということを、よくよく考えておくれ。そなたのように、一々の事に氣を遣つていれば、きつと胎中にもよくないひびきを與えることになるからの。」

奥方は、夫からの優しい言葉を全身で受けていた。そして全身をふるわせながら心の中で喜し泣きしていた。

「きつと、きつと、胎の中のこの生命を、夫の望む通りの、理想の、男子となるように、生長させたい。」

奥方は堅く堅く心の中で誓つた。そして、その漆間家へ嫁ぐ前に、秦氏の實母からこんこんと説き聞かされた胎教を嚴肅な氣持で實行しようと思つた。

世の中は、物質的窮乏のために、人々の心は尖つてゐる。そしてその尖つた心と、尖つた心との兩方の尖端が接觸することによつ

て、斷えず争いの火花が散つてゐる。尖つた硬い心！世の中は、この尖つた心、硬い心で充滿してゐる。斗爭堅固とは、全く、この世の中を、最も適切に表現した言葉ではないか！

一體、人々の心が尖り、硬くなるのは、悉く物質的窮乏によるのだらうか。物質的窮乏は、確かに人心を尖鋭化し、硬化してゐる。これは疑うべくもない現實の事實である。しかし、物質的窮乏と人心の尖鋭化、硬化との間に、全面的な無條件的な因果關係が成立すると考えることは、果して正しいことであらうか。物質的窮乏によつて心を尖鋭化されたり硬化されたりしない人々も、必ずしも無いとは云えない。しかし、このような人々は、物質的窮乏のもとに於ける生存競争の敗殘者となることは必定である。又逆に、物質的飽滿は必ずしも人心の尖鋭化、硬化をもたらさないとは限らない。富めるものは、必ずしも吝嗇でないと限らないのである。従つて、物質的窮乏と人心の尖鋭化、硬化との間には、全面的な無條件的な（必要にして充分なる）因果關係が成立しないのである。

こゝで問題の重點は、むしろ、物質的窮乏によつて心を尖鋭化、硬化されない人々が、何故生存競争の敗殘者とならねばならないかということ、及び物質的飽滿によつて心をますます尖鋭化し硬化して行く人々が何故存在するのかということである。これらの問題を解決するためには、どうしても人間性の本質にまで突き込まねばならない。これらの問題は、外面如菩薩、内心如夜叉と云われる人間性の、美しい外面にではなく、醜い内面の裡に存する。人間の内なる醜きもの、それを端的に云えば、「偏つた功利心」、「利己心」である。生存競争に敗れるのは、この「利己心」の排除した人である。物質的に飽滿して猶且つ心を尖らし硬化させる人々がゐるのは、こ

の「利己心」があるからである。

そもそも、「物質的窮乏が人心を尖鋭化し硬化する」というテーゼそのものが、實はこの「利己心」を前提することに於て成立つのである。若しも或る人が「社會が物質的に窮乏してゐるから、人心が尖鋭化し硬化するのだ」と云うならば、その人は「自分は利己主義者である」ことを認め、且つ自分がその信奉者であることを自己紹介してゐるにすぎない。又、「衣食足りて禮節を知る」聖人があるならば、彼れは先づ何よりも、自己が利己主義者であることを告白しなければならぬ。

利己心！利己心！！この心が無くては、人間は一日として生存競争に耐えることが出来ない。利己心の強い人間、これがいわゆる強い人間である。利己心の弱い人間、これがいわゆる弱い人間である。弱肉強肉とは、利己心が人間を食うことを意味する。人間を利己心から守らねばならぬ。弱い人間を強い人間から護らねばならぬ。利己心に基く、生存競争の社會から、弱い人々を護り、弱い人々のみによつて構成される「淨い社會」を設けねばならない。弱い人々は放置されたまゝでは可哀そうだ。弱い人々が互いに手を取り合つて構成して行く社會、弱い一切の人々が、その各個の一人々々の力を出し合い統合することによつて、彼等一切の人々が救われる道はないだらうか。

この道を求めようとする人々は、特に京洛の地に多かつた。物質的窮乏と、それによつて剥き出しにされた人間の「利己心」の醜い斗争の最も激しかつた京洛の地に、こゝ十數年前から、一連の誦文のような言葉が、人々の間に流布し始めた。その言葉は、

「二人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行」。(つづく)

## 隨想三題

### 欣求淨土

須藤隆仙

一生懸命勉強して居る小學校の子供に、何の爲勉強して居るの、と聞いたら「學校で一番出来る生徒になる爲だよ」と答えた。

やはり懸命に勉強して居る中學生に同じ様な質問をしたら、「大學へ行こうと思ふから勉強して居るの」と答えた。

親が子に對して、一生懸命勉強しなさいと云ふのは必ずしも其の子を、クラスの中で席

次を一番にする爲とか、又上級學校へやる事のみを目的とする爲ではないだろう。一人前の人間として、立派な社會人として子供を育て上げたい願が最も大きな望みであらうが然し子にしてみれば、立派な社會人とか、一人前の人間等と云ふ事は未だ理難出來難く、結局、學校の席次が一番だとか、大學へ進學出来るのだ等と云ふはつきりした目標を得なければ満足出來ないのである。

「學校の先生に叱られるから」等と云つて勉強して居る子は決して身についた學習は出來ないだろうし、どうせ卒業してからは學問等 unnecessary のだから」等と思つて勉強と云ふ事に臨んだ子供も勿論充分な學修は得られないだろう。

子供のみではない。大人でもそうである。一つの目標を目指して進むと云ふ事は實に意義深い事である。

人間は必ず希望を持つて居る。大町桂月の言葉だつたと思ふが「青年は戀愛に生き、壯年は事業に生き、老年は自然に生きる」と云ふ意味の言葉がある。極く通俗的の様でもあ

り非通俗的の様でもあるが、とにかく生きる」と云ふ事自體はこの様に何か知ら、目ざすものを持つて居るのである。

希望を失えば死なねばならない。自殺の原因は皆、希望を失つた事に起因する。厭世自殺は勿論、病苦自殺でも、貧困苦自殺でも、家庭不和自殺でも、將來を苦にした自殺でも業務失敗自殺でも、失戀苦自殺でも、皆、希望を失つたと云ふ事が究極の原因なのである。

理想に對して現實が余りにもみじめであつたと云ふ自己破滅でも、やはり到底つかみ得ぬ理想を求めたと云ふ所に第一歩から誤りがあるのであり、全く全く程遠い不可能な理想であつてみれば、其の爲に死ぬと云ふ事は、これも又希望を失つたからなのである。

してみれば生きると云ふ事は希望を持つ事であり、逆に又希望を持つと云ふ事は現實に生きると云ふ事なのである。

欣求淨土とは阿彌陀佛のお淨土を欣び求めると云ふ意味であるが、これこそ人間最高の希望であり、至寶の理想なのである。金もう

けとか、立身出世とか、結婚とか、色々の理想もあるが、極楽浄土を求むると云ふ事程、深くそして大きい望みはないのであろう。

限られた小理想の中では其の目的に向つて小さき限られた歩みより出来ないであらうが、無限の大理想の中には大まかな限り無き歩みが出来るのである。

浄土を欣慕する事こそ現實を最も高く尊く生かす事なのである。

欣求浄土と云ふ事は現實を忘却した夢である等と考えて居る人があるが、これは大なる誤りであつて、欣求浄土とは、最も現實的なものの根底として、即ち現實の母として、眞實の存在であり、不可缺の存在である事を知らねばならない。

元祖上人の

「一丈の堀を越えんと思はん人は、一丈五尺を越えんとはげむべし。往生を期せん人は決定の信（稱名念佛で必ず救はれると信ずる事）をとりてあいはいはげむべき也。ゆるくしてはかなうべからず。」

との御法語も、かゝる所に尊く味えるのではなからうか。

## 鬼子

水野善朝

畠山さんが私共の家に近づきになられて、もうかれこれ十五年は経つてであらうか。何時見えても丈夫そうに陽焼けた顔に髪も黒々として居られた。だから私自身が子供から大人になつてしまつたことに氣付かぬ限り、畠山さんの年取られたこともわからない程だ。

畠山さんが私共と懇意になられた裏には、悲しい物語が潜められてゐる。當時中學二年に迄進學された一人息子さんが急病で亡くなられ、途方に暮た儘に其の寫眞を抱いて來るともなく辿り着かれたのが私の寺だつた。高原の寒冷地に家を持つ畠山さんの所から私の寺に來るには、汽車で四時間余も要するので

ある。どんな不便も不都合も畠山さんにはなかつた。夫以來、今は亡き吾が子の事に引かれつゝ、頻繁に參詣に來ては一泊して行かれるのが常となつた。

畠山さんは貧乏な村の發展の爲に、戦前は滿洲開拓の移民に奔走し、それが水泡に歸するや新たな事業を起し、今は又北海道の未開地開拓に着手されようとして居る。其のぶこつな指は例え百姓の指であつても世間の爲になることなら何でもやつてみせると云ふ自己の信念の實踐を如實に語つてゐた。私は屢々豊富な人生の體驗談を耳にすることが出來た。「わしや學校もろくに出不す、無學文盲の男ですが」

と少量の酒に赤らんだ顔に老いて益々盛んな斗志を堪えながら語られるのであつた。

「村の若い衆にもよく云つて聞かせることだが、秋になつて稔つた稻を脱穀しますね。あの一ふさの稻の中で、最初に脱穀機に觸れた途端にはせて外に飛び出す穂があるんです。その外にこぼれた稻を人は皆な鶏の餌にして呉れてしまふから駄目だと云ふんです。わしやそれをいけないと云ふんです。なぜつて云

ふに、外に飛び出したのは鬼子と云つて親に似ない子なんです。外に飛び出す位だから親より強いんです。だからわしが云ふのは、其の外に飛び出した稲を拾つて翌年の種子にしろと云ふことなんです。親より強い子だから猶 stronger 子が生れて稲の收穫も多くなるんです。さて其の次の穂は普通に脱穀されて下に落ちる。これはまあいゝとして、幾ら脱穀機にかけてもどうしても落ちない

これが所謂糞ふと云ふ奴で、どうしても親の側を離れられない代物です。弱い子は何時まで経つても親元を離れられないのが世の情で、人間も稲も變りありませんね。だからさつき云つた鬼子と云ふ奴が案外大切なんです。これが世間に出て思ひがけない大きなことを仕遂げることがあるもんです。」

善意に充ちた眼をほころばせながらそう云ふ畠山さんの至る所に、亡くなつた息子の分まで働くんだと云ふ意氣込みが漲れてゐて、とても五十を越した人の様には思はれなかつた。

私は私かに畠山さんが青年に向つて辯舌を振はれるであらう姿を想像しながら、畠山さんは一體鬼子に屬する方なのだらうかと思つてみたりしてゐた。

## 所謂正義

河野 達雄

シナの世界的ユーモリスト林語堂はこう云つた。東洋と西洋とを分ける一つは握手である。西洋では他人の手を握るが、中國では自分の手を握る。所が、西洋人はシナの銅貨はバイ菌の巢だとけなす程衛生觀念が發達してゐるくせに、むやみに人の手を握るのは、ちと變でもあるし、又、その習慣自體が、中世の騎士達が相手に親愛の情を表はすために籠手を脱いで握手した、いわば蠻風の名残りだ其點我々の方が衛生的で文明的である、と。

此の流でいくと、チューインガムも問題だ。

なる程齒を掃除してよいが、往來で、口をむが／＼させてゐるのは、口から空中のごみを食べてゐるようなものもあり、無作法極

りない。クリスマスに七面鳥を食べるのだつてそうだ。せめて聖なる日は、慈しみの心を持つてみたらどうかと考えるが、之は、日本に精進料理を傳へた佛教者流の考で、日本に最初に肉食の風を傳へた宣教師達とは感覺がちがうかも知れない。

とにかく、自分々々の矛盾は、なか／＼氣づかぬものだ。占領中に、いろ／＼我々島國族にとつて有益なる思想や機會が與えられたが、そうでないものもあるはずだ。あの戦犯裁判も當然の降服者の受けるべきものではあつたが、あの時の立派すぎる裁判の言葉が氣になる。この裁判は勝者が敗者を裁くのではなく、文明そのものの、人類の正義が裁くのだと云われた。勝者のそれでないとするれば、今次大戦の戦争に伴う犯罪は全て訴えられてよかつたはずである。南京の市民殺害が戦犯ならば、原爆はどうか、成程、それに伴う人命以上の人命を救い、平和を持すためとは云われるが、もう當時日本は降服へ動きつゝあつた事が外國に知られてゐたのだ。此點を指摘したのはインドだけであつたが、我國の新聞雑誌には大きく出なかつた。あの裁判そのものは必然であるが、裁判成立の言葉の持つ矛盾は少々氣になつたものだつた。



# 阿彌陀經の話 (二)

藤井實應

「是の如きを我れ聞きき。一時ほとけ舎衛國の祇樹給孤獨園に在しまして、大比丘衆千二百五十人と俱なりき」

お經の初めに「是の如きを我れ聞き」とありますが、このお言葉はどのお經にも初めに出てくるお言葉です。釋尊御入滅の後、まもなく王舍城ビツバラ堀で、佛典編纂の會議が開かれました。これを佛教史上で「第一結集」と申していますが、その時、多聞第一、記憶第一といわれ、釋尊に多年隨待していた阿難尊者が、經典の説述者となつたということは諸傳一致しております。即ち「是の如きを我れ聞き」の「我」は阿難尊者のことで「かように私(阿難)は承りました」ということであります。「是の如き」は「そのまゝ」或は「眞如」ということで、偽りのないこと、即ち「信」をあらわしています。「佛法の大海には信を以て能く入ることが出来る」「是の如くとは即ち信である」と龍樹菩薩は『大智度論』に説かれています。佛陀釋尊のお説きなされた法を全く無我の心で、阿難尊者が聞法信順するすがたが、「是の如きを(信)我れ聞き」、「(聞)と經

のはじめに示されたわけであります。説き手(佛陀釋尊)と聞き手(阿難尊者)とが一つになり、信と聞とが一つになつています、そこに生きた教があらわれてくるのであります。

經典は、その傳持の正確を示す爲に、この經典は、いつ、どこでだれの爲に説かれたという一座説法の形で編纂されています。「是の如きを我れ聞き」、「時」「説主」「處」「聽衆」の順序で示し、終りにその利益をあげるのが、經典の普通の組織順序であります、即ちこの阿彌陀經にも、是の如く(信)我れ聞き、(聞)一時(時)佛(説き手即ち主)舎衛國の祇樹給孤獨園に在しまして(處)大比丘衆千二百五十人と俱なりき(聽衆)とありまして、信、聞、時、主、處、衆の六が示されています、この六條件が合して、佛の説法が成り立ちますから、これを昔から六成就と申しております。

さてこの阿彌陀經をお説きになつた處、即ち祇樹給孤獨園は普通に祇園精舍と申し、舎衛國の首府舎衛城の間近にある寺であります。「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり」とは、彼の『平家物語』開卷第一に出てくる言葉として、あまねく世に知られています、

その精舎建立に就ても有名な物語りが伝えられています。即ち舍衛城に須達多という長者があつた。慈悲心に富み、貧乏人や孤獨の者をあわれみ、常に布施を行じたので、多くの人々から給孤獨長者と尊稱せられ、厚く佛陀釋尊に歸依しておりました。その頃、お寺を建て、釋尊に獻じたいと考えまして、舍利佛に相談し、彼の檢分によつて舍衛城の南約一マイルのところ、竹林の繁茂する森林を見立て、候補地としました、それは版斯匿王ハシツクの王子祇陀太子の土地でありましたので譲りうけたいと願ひ出ましたがお許しが無い。再三お願いした結果、地面の上に金貨を敷け、敷いただけの地面を金貨の値で分けてやろうとのことでした。給孤獨はその土地に金貨を敷きはじめました。さすがの太子もこれには驚いて、そんなに土地が欲しいというのには何かわけがあるだろうと、その事情を聞くと、釋尊に獻上するのであるという。そんなことであつたか、それならば私（太子）が獻上したいという。いや私（長者）が獻上したいという。兩人とも獻上したいというので、相談の結果は、給孤獨は土地を買い建物を建て、獻上する、祇陀太子はその土地にある樹木を供養するということになりました。そこで祇陀太子が捧げた樹木というので祇樹、それから給孤獨が土地と寺を獻げたというので、合せて祇樹給孤獨園と申したのであります。

ある時（一時）釋尊はこの祇樹給孤獨園に在しまして大比丘衆千二百五十人と御一所でありました。大比丘衆はすぐれた比丘達の意であります。比丘は所謂出家して僧團に入り、その規則を守り、五戒乃至二百五十戒という戒律を持つて、専心修行してゆく人達であ

ります。

「皆これ大阿羅漢なり、衆に知識せられたり。」

千二百五十人の人達はみな大阿羅漢で、多くの人を導いて、善知識と崇められている人達であります。

阿羅漢というのは無學、或は應供と譯します。無學とはもはや學ぶべきを學んで、もう學ぶべきものも無いという境地にまで至つた人の意であります、しかしまちがえてならないことは、學ぶべきものも無い境地だというて、何も學ばないでぼんやりした人になつたということではありません、むしろ學ばざるなしという精進のすがたで常に學び學んで、而も學ばねばならぬというところわれや、學んだというところわれを離れている境地にあるをいうのであります。應供は世の供養を受くる資格ある位に至つた聖者の意であります。千二百五十人の比丘衆は、かゝる聖者となり、多くの人を導き、多くの人達から慕われている人達であつたというのであります。次に經にその主なる人の名が掲げられています。

「長老舍利弗、摩訶目犍連、摩訶迦葉、摩訶迦旃延、摩訶俱絺羅、離婆多、周利槃陀迦、難陀、阿難陀、羅睺羅、憍梵波提、賓頭盧、波羅墮、迦留陀夷、摩訶劫賓那、薄拘羅、阿菟婁陀。」

こゝに十六人あげられています、長老とて、出家してから長年

修行し徳の高い人で衆僧中の元老、宿老といわれている人達ばかりであります。十六人であるから阿彌陀經の十六羅漢とも申し上げますが、しかし世間で申す十六羅漢、よく畫像や、彫像にあるもので即ち釋尊の勅命をうけて永く此の世に住して、正法を護持せんと誓はれた『法住記』の十六羅漢とはちがいます念の爲に申し添えておきます。阿彌陀經の十六大弟子については、それぞれ傳記も傳わつていますが、智慧あるものもあり、無いものもあり、貴族波羅門出身もあれば、卑族首陀羅出身もあります。それぞれの特性をもちつゝみな釋尊の教をうけて修行し、それぞれの特色ある聖者となられたのであります。

「かくの如き等の諸の大弟子なり、並に諸の菩薩摩訶薩あり、文殊師利法王子、阿逸多菩薩、乾陀訶提菩薩、常精進菩薩、かくのごとき等の大菩薩、および釋提恒因等の無量の諸天大衆と俱なりき。」

釋尊說法の會座には、かような大弟子のほかに諸の菩薩摩訶薩が列つておられる。菩薩摩訶薩というのは菩提を求める人、即ち上は佛陀（覺者）となり、下は一切の衆生を導かうと願う人のことであります。その菩薩の中にも、文殊菩薩は菩薩の首位におかれている徳すぐれた方であるから法王子と申し上げる、その文殊菩薩はじめ阿逸多菩薩即彌勒菩薩とも申上げる大菩薩や、乾陀訶提菩薩（香象菩薩ともいう）や、常精進菩薩などの諸の大菩薩が列せられたのである。そのほか釋提恒因即ち帝釋天という忉利天の主、佛法守護の神

はじめたくさん諸の神々（天）も俱におられたのであります。

かように釋尊の說法會座に列つた對告衆は、千二百五十人のお弟子だけではありません、菩薩、諸神、諸天も共に聴いておられるというのであります。それは時を隔て、處を離れて、三世十方の菩薩や神々に及ぶというまことにひろやかな心が示されているのであります。時と處とはへだたつていますが、私たちも今こゝで、佛陀の說法を拜聴することができ、そうしたひろいひろいお心もちがこの文によつて頂けるのであります。それゆえ私たちもこれからはいまろうとする佛陀如來の說法をを心靜かに拜聴したいと思うのであります。

これまでが序文、即ちこの經の説かるゝに至りし事情を述べた部分であります、これからがいよいよその本文で、如來の說法がはじまるのであります。

### ●支部規定

一、會員五名以上の地區に「淨土」支部を置く事ができる。

二、支部長は會員の紹介者を以つてする。

三、支部は本部より講師派遣等に関して便宜をうける。

本部關係の講師については旅費のみ支部負擔とし其他、指名講師仲介の勞をうける。

四、支部長は行事報告をする、之は適宜誌上に掲載する。

# サーマルの日本人村

— 開教日誌の一節より —

## 白井憲成

ロス・アンゼルスに近く、サーマルと云ふ所がある。近くと云つても、自動車で三、四時間もかかる距離の所である。しかも、その自動車の速さは、日本では想像も出来ない平均六、七十哩の事であるから、ざつと東京と静岡位は離れている譯である。そんなに遠く離れた所を日本では近くなどとは言はないが、アメリカでは、若干距離の觀念がちがふので、つい近くと言ふ事となる。

このサーマルと云ふ所には、二十年、三十

年の間、あらゆる自然の障害と打ちたたかひ營々たる努力の結果、今はこの炎熱と不毛の地に一大農場を作りあげた幾多の日系人が居る。

アメリカを訪れ、機械文明の驚異に眼を見る人は多い。そして又その物質文明の絢爛さをとく／＼として語る人は多い。又日本人の多くも、これらの紹介のみを通して、アメリカのはなやかさに羨望の眼を向ける。しかしそれはそれとして意味もある事である

う。所が我々の見る眼は、このはなやかさのみに終始してはならない。背後に横たはる、幾多の苦闘を、その絢爛さを通して常に見つめて行かなければならない。それこそはなやかなる物質文明をささえるものであるからである。

今そのもつとも好例と思はれる日系人の不屈の努力の一つを紹介しよう。これは我々日本人の誇りであると同時に、これらの人々の苦闘にも報いる所以でもあるからである。

## 死の平原

近代機械文明の尖端を行くロス・アンゼルスから国道第九十九號線 (U. S. Interstate Highway) を南東へとり、ものゝ二時間もたてば、近郊の市を離れて、カウボーイの映畫に見るような自然が開けて来る。ゆるやかなスロープ、點在する森、燦々とふりそゞぐ太陽、これは全くアメリカ的な自然である。キヤリフォニア・サンシャインは日本の小春日和といった所である。日本の農業を、箱庭的な藝術にたとへた白人の言葉が想ひ出される。際限のないこのゆるやかな起伏の平原を猛烈なスピードで走る自動車から眺め乍ら、嘗て旅行した滿洲の平原へと聯想は移つて行

く。たゞ一つの違いは滿洲での重くるしい空氣の重壓ではなく、限りなく澄み渡つた碧空の輕快さだけである。この限りないひろがり、たしかにアメリカなのだ、と、それからそれへと考へ續ける中に、自然は急激に變貌を呈して来る。

見渡す限り、緑の一片も認めない岩山の起伏は、その岩かげに、インディアンの呪詛の叫びを聯想せしめ乍ら迫つて来る。サボテンのしげみは、なお一層その岩山に凄みを持たせる。ふと、かつて日本で見た映畫「死の谷」"Dead Valley" を想ひ出す。日本で意味する谷は、正しくはヴァレーを意味しない。日本の盆地、或は平原が意味するものが當を得ている。

たゞ、インディアンと云ふ實際の原住民を見ないと言ふだけで、砂丘と岩山の起伏は、死の平原にふさわしく、沈黙と絶望の中になつてゐる。

この國道は、メキシコ境に通じ、更に大陸中部を横斷する主要幹線だけに、行き交ふ自動車は各州雜他である。車體鑑札を見ただけで。はるか東部、中部、又西部諸州と云ふ事がすぐわかる。そして無限に廣いアメリカ大陸が、この一すじの帶の上に縮小されている

やうでもある。

もうこゝろあたりから道は少しづつ下り勾配となる。碧空にふりそゞぐ、キャリフォニア・サンシャインも、灰色にどよんで来る。しかも滿天には雲の一片も見ず、丁度灼熱された鐵のにぶき光の如く、太陽は重くかゝつてゐる。この太陽は、今から訪れんとするサーマル、又そのはるか奥地に向つて、燒きこがすばかりにてりつけてゐるのである。

遠くにそゞり立つ奇岩峨峨たる山系も、空氣のやわらぎのかすみでなく、このにぶき光を受けてぶきみにしずんでゐる。

少しづつ下り勾配となると言つたのは、これからさきに展開される地方は、嘗て、それは大昔のことだが、大きな湖水であつたものが、地殻の變動で旱魃し、丁度すり鉢の底のやうになつてゐるからである。海拔以下にあり乍ら、一年を通じて、曇りどころか、一滴の雨も見ないこのすり鉢の底は、照りつける太陽の直射を受けて、るつぼの底のやうに、むせかえるのである。乾ききつた、見渡す限りの砂丘の連續があるばかりである。一本の草も、したがつて木の一枝も見られない砂漠の中に、ましてや一匹の虫けらさへも生そく出来ないこの砂漠のひろがり、その周圍に

屏風のやうにきり立つ山の故に、誠に死の平原の名にふさわしきものである。

冷える事のない灼熱の無風状態が、このすり鉢の底につゞく事は自然であらう。この地の果に何が待つてゐるのかとも考へられない様な底へ向つて、國道は一すじの帶の様にぬふてゐる。この平原を縦貫する國道は、ながい年月と、幾多の勞力に依つて完成されたものだと云ふ。一滴の水もない所へ作りあげられたこの幹線道路の上を、疾風の如く、行き交ひ、追ひつ追はれつする自動車の群は、この死の平原を一分でも一秒でも早く通りぬけやうと、知らず識らずの間に速力を増してゆく。

車窓を飛ぶ様に去つて行く、道路指示標、それと一諸に立つてゐるインディアン・ランチ分讓の立札を見て、この不毛の地に迫る開拓精神の雄々しさに驚嘆すると同時に、近代機械文明の極度の發達が、このインディアン原始自然と面白き對稱をなしてゐる。しかもこの、沈黙と灼熱の無風状態の中にも突如として烈風が吹きすさぶのであらう。起伏する砂丘の肌は、波の如くゆれてゐる。道ばたの砂にうもれたタイヤの引きさかれた切れ端は、こゝで起る幾多の自動車事故の

残がいであらう。そして又、時折見受けられる、昔インディアンが通つたと思はれる様な古い道あとは、丁度吹雪にうもれた山道のやうに、行き先きは砂山に消えてしまつてゐる。何かの調査の爲にだらう、側に乗りつけられてゐるニュー・カーも砂塵に見るかげもない。たゞ一すじの國道の上だけが呼吸してゐる。その左右には無限にしずまりかへつた死の平原が起伏してゐる。

この砂漠に入つて三、四十分も來た所で、道は二つに分れ、國道を離れた道は、右手にそびえる山に向つて大きく迂回して、バーム・スプリング *Palm Spring* と通じてゐる。

こゝはロスアンゼルス、いな西部沿岸地方の富裕階級の別莊地帯だと云う事である。この灼熱の砂漠のはてに、そんな別莊地があると、不思議な話でもある。しかしこゝも眞冬の避寒には最適にちがいない。そこで豪莊な邸宅が山手に作られたのであらう。成程有名なある女優の離婚訴訟を、バーム・スプリング發と記載してゐた新聞を読んだ事を覚えてゐる。しかし今こゝでは、これらの豪莊な避寒別莊地帯は縁遠い話である。何故なれば、暑い所は冬は暖いにきまつてゐるからであり又そこに富裕なる人々が別莊を作る事も自然

だからである。今直接の問題は、更に更にすり鉢の底にすべる様にすいこまれてゆくその底にある我々日系人の村を訪ねる事である。

### 地理的背景

こんな砂漠を走り續けて、一體この果に何が待ちうけているだらう、といふかしの眼を見はるのは至極當然である。車はちよつとさわればいつべんにやけどする程やけきり、汗も出盡してしまふやうな暑さの中で、満目灰色にどよみきつた沈黙の空がおほいかぶさつてゐる。そのはるか彼方に、突然緑のオアシスにも似た輝きをもつて迫る一大草原が展開して來る。絶望の眼のどよみは歡喜の眼の輝きに變る。全く夢の様である。どうして、この美しい緑が、この不毛の海に生びあがつて來るのだらうか。

これが今からのべようとする、サーマルの日本人村なのである。

見え始めた緑の地平にはつとする間に、それは大きく迫つて來る。枯渴しきつた身體は緑を見た瞬間よみがえつて來る。緑といふ色が自ずと水を聯想せしめるからであらう。窓に大きく迫つて來る緑は、巨大な防砂林である。自然の猛威にうちかつて、こゝに農場

を開く爲に先ず防砂林がつくられた事は、當然であらう。この巨大な熱帯樹の林のすそは大きな砂山でおほわれている。絶えず、吹きつける砂まじりの熱風は、先ずこの防砂林でよめられる。これは山陰地方の西部に見られる防風林の如く、單に家屋を守るだけではない。渺漠とした中にこの防風林に依つて一つの農場の區劃をも作るのである。こゝでは自然は全く不毛のひろがりである。その中に作られた極く少部分の農耕に適する土地それを守る爲に防砂林は作られたのである。

これからオレンジの實のたわわな畑、整然と並ぶデッツの林、見渡す限りの葡萄畑、トマトを始めとする野菜畑、今それを目の前に見て、何時間もかゝつた、砂漠の旅の疲は一度にいやされてしまふ。

高温である事は、ものの生育には最適の條件であらう。しかし一日として雨を見ないこの地に、如何にしてこの様な緑のオアシスが作りあげられたのであらうか。砂漠にオアシスはつきもののやうである。しかしこのオアシスはロマンチックな砂漠の夢をそゝるやうなものではない。多くの人々の血と汁に依る營々たる努力に依つて作りあげられたものである。

こゝからは、開拓初期を物語る日系人の話に耳をかさねばならないであらう。

このサーマルの平原のはるか向ふに湖、紺青の湖らしきものが見えかくれする。これが海拔以下二四六フィートの *Salton Sea* である。これは鹽湖と呼ばれ、こゝら一帯の平原の中でももつとも低い場所であり、したがって、干魃しきつたこの湖の最後の姿でもあらう。

この不毛の地に多くの日本人が定着するに

## スイート、ホーム

### の 作 者

のように述べている。

「まことに奇妙な話だが、世界中の人々に家庭の喜びを誇らかに歌った私自身、實はいまだかつて『わが家』というものの味を知らず、また今後とも味わおうとはしないだらう云々」と。

彼はこの手紙を書いて一年後、一度も家庭をもつたことがなかつた。それこそ文字通り一文なしの貧窮のどん底にあるときだった。彼は一生涯、家庭をもたず、地球上をさまよい歩いたと云う。

一八五一年三月三日附、シー、イー、クラーク宛の手紙で彼は次

到つた諸種の理由は、その歴史的背景よりもむしろ、地理的條件から容易に見出されるであらう。歴史的背景と云ふのは、キャリフォニアの發達は、十八世紀中葉に於けるキャリフォニア・ミッションの偉大なる業績と切り離しては考へられないと云ふ意味である。したがつて日本人がこゝに登場する筈がない。それならば地理的條件とは何かと問はれなければならない。

コロラド河がキャリフォニア灣へ注ぐ豐饒な平野は、キャリ

フォニア州と境を接している。初め

メキシコに移住し

た日本人たちが、

キャリフォニアの

太平洋岸へ北上す

る道は、たゞこの

一つの峡谷をぬふ

事だけだったのだ

がある。今はアメリ

カ大陸横斷鐵道の

中一番南を走る南

太平洋鐵道が太平

洋岸からアリゾナ

を越え中部へ走つてゐる。『この鐵道是我々が作つたやうなものだよ』と云う老人の言葉から、彼等の移住がこの鐵道附設事業に關係ある事が察せられる。メキシコと國境と接しつゝ走るこの鐵道の附設事業が、不毛の地にも日本人を定着せしめるに到つた唯一の理由であるとなつた時、同じ勞働事業に従事し乍らも一方には、ロス・アンゼルスを始め、西部沿岸のもつとも恵まれた自然的環境の中に住む幾多の同年輩の日本人の事と思ひ合はした時、このメキシコに通ずる一つの峡谷に、日系人移住の歴史を眼の前に見るやうな氣がする。

コロラド河を遡行しても、グラランド・キャニオンの幽谷は愈々コロラドの高原へと導くだけである。それよりも、インベリアル谷を乗り越えさへすれば富よくなキャリフォニアの平原が展開する事だけはうけあいである。この意欲をそゝり、しかもこれを容易に遂行させたのは、彼等が皆従事していた鐵道附設工事だったのだであらう。

老人たちの言葉は、一様に各々の經歷の斷片にしか過ぎない。しかし苦悶を物語る言葉から結論づけられるものは、正確な史實的根據のある意味での裏付ともなるものであら

う。

國道第九十九號線は南太平洋鐵道と共に、西南部が中部と結ぶ主要幹線である。したがって左右に展開する種々の様想も又キャリフォニア發達の地理的條件の意味するものとして受け入れらるであらう。

『あれを越えればメキシコですよ、今でも、澤山のメキシコ人があの山を越えて、キャリフォニアに入つて來ますよ』と指さすふしくれたつた老人の指の方向には渺漠と岩山が連なつてゐる。そう云へば、今までたしかに密入國者檢問所があつた事を思ひ出す。地圖を見て始めてこれがメキシコに通ずる唯一の道である事に氣づく。『あれを越えれば』と云ふその山は、やはりこの荒漠たる起伏のつらなりであらう。山に一木も發育し得る筈は無い。たゞぶきみに、にぶく炎熱の彼方に横たはつてゐる。『俺は、あの山を、越えて入つて來たのだ』などといふ老人は一人も居ないしかし邦人との話題の中に、同じテーマを何回聞いた事か。これはたんなる話題とするにはやゝ不可解である。成程そう云へば、今までの行程の中で、このやけきつた國道を歩く勞働者風の男を一・二見た事は事實である。又このサーマルで農業をいとなむ邦人が使用

するのは殆んど全て、この様な類ひのメキシコ人だと云ふ事も聞いた。これはかさみゆく勞働力の負擔を削減する爲には、最適かも知れない。

しかし、それより驚く事は、この自然的障害を乗り越えて行はれる、人間の移住である目的は種々あらう。しかしそれへの闘魂である。メキシコ境を主題としてえがかれる種々の映畫は、殆んど全て死を諸して行はれるこの生の闘ひなのである。このサーマルと云ふ日本人のそれも、その一つの片鱗として見るならば、其處にひめられた深き意味を忘れる事は出來ないであらう。

キャリフォニアに於ける、日系人發展史を作る爲ならば、成可くは年老ひた邦人に、彼等のキャリアを聞く必要があらう。しかしここでは、たゞ彼等の業績をたゞえる事だけで十分なのである。

このサーマルと云ふ日本人村を、以上の様な地理的條件の上において見る時、死の谷はよみがえつて來る。ひろく、コーチュラ平原更にインペリアル平原とのびて、コロラドの富よくの地に連らなるところ、それは一瞬にして不毛の地でもなくなりそうである。しかしこの平原と云ふ言葉だけでは、何等眞に

迫る描寫を與える事が出來そうにもない事をうれえるのである。その爲には、今までの敘實に更に言語を絶すると云ふ形容をつけ加える以外に道はないのである。(つづく)

無量壽佛

無量光佛

なむあみだぶつ

このひと聲こそは

あめつちをつらぬき

生死の海を超え

さえられぬ大道に

ひゞきわたりて

はて知らず

なむあみ

なむあみ

あみだぶつ

佐藤良智

# 讃岐法然寺を訪ねて

安居 香山

春漸く深い三月の末、私は或る機を得て讃岐路に旅立ち、佛生山法然寺を訪れる事を得た。法然寺の由來記に依れば

此等は、今を距ること凡そ七百五十年、建永年中、淨土宗祖法然上人が、謫居遊ばされた舊跡であり、大師廿五靈場の隨一、第二番所の拜所である。寛文年間（一六六一

一七二）四位少將松平頼臣公本州の刺史に任ぜられ、大師の遺跡廢頽し殆んど湮滅せんとするを觀て、懷嘆の余り現今の地を卜して再興の業を企てられた。寛文八年三十

三門二十余年の佛閣僧房を建立し、大師御自作の阿彌陀佛（宗寶）及眞影を此に安置し、且大師の廟塋を山頂に築き、檀下に來迎堂を設け、不斷常念佛會を行はせられた。是に於て當寺は南海屈指の巨刹となり、山號を佛生山、院號を來迎院、寺號を法然寺と呼ぶことになった。

とある。

正にこの寺は、南海屈指の巨刹と言ふにふ

さはしい。彼の有名な金刀比羅行きの電車に高松から乗る事しばし、佛生山町と言ふ驛がある。山號がそのまゝ町名となつて居る事を見て、この寺が如何に名利たるに値してゐるかが分るであらう。

更に、一度この地を踏み、歩く事十余分、池の畔を通つて山門の前に立ち、古さびた一山の七堂伽藍を見るときは、誰しもこの寺の歴史とその偉大さに驚嘆せずには居られまい。小山を背景とした七堂の配置、已に剝げ落ちた塗りの中に見られる且つての莊嚴さ、それは人里離れた南海に、置き忘られた寶玉にも等しい。

私が敢へてすぐ近くにある金刀比羅に行く事を止め、この寺を訪ねたのは外でもない。それは吾祖法然上人が、流罪の身を寄せられた遺跡を訪ね、偉大なる古聖の跡を偲びたかつたからである。

道々考へて居た謫居の地としての法然寺は聊か私の期待を裏切つた。何故なれば、上人

## うら盆風景

町は中元大賣出し。赤い幟りに青い旗盛り場にはチンドン屋の鉦太鼓。道行く人も早や夏姿。

まことに一年のめぐりは早い。去年の盆には未だ這つていた赤坊も、今年は早や立ち歩くようにもなつた。子の生長は人生の目盛り。つい平常は仕事に追われ心ならずも、朝夕の拜禮も時に怠りがちな御先祖の御靈への奉仕、今日、うら盆の十二日。

迎火や父のおもかげ母の顔

亡き父や母、さては幼き日その膝に抱かれた祖父や祖母。在りし日の面影を偲びつゝ、今日のみは、せめて年一回のお迎えと、早めに仕事を切り上げ、汗によごれた體を行水に清め、素肌にすがすがしい浴衣をまとい、子等を集めて門口に焚く迎え火の、おがらに立つ煙こそ、父を慕い、母を戀うわが心そのままに、去

適居の地としての此の寺は、余りにも偉大すぎたからである。私にしてみれば、瀟洒な方丈の庵室こそ、ふさはしいと考へてゐたのである。

住持細井僧正は、舊知の師である。そしてこの寺は、又私の恩師の住持して居た寺でもある。私にとつては淺からぬ縁があると云へる。然しこうした私情を捨てゝもつと強く求めたものは、祖師上人の跡の薫りであつた。

云ふまでもない。念佛弘道の爲に身命を賭し、「このこと言はずばあるべからず」とて喜んで流罪の身となられた上人の尊さが身に浸みて味はひたかつたのである。

一度勅修御傳を紐解くとき、われ／＼は次の如き強い語に接するであらう。

「いま事の縁によりて、年來の本意をとげんこと、すこぶる朝恩といふべし。此法の弘通は、人はとどめんとすとも、法さらにとどまるべからず。諸佛濟度のちかひふかく冥衆護持の約ねんごろなり。しかればなんぞ世間の機嫌をはかりて、經釋の素意かくすべきや」。

何と言ふ偉大な、そして強い言葉であらうか、私は此の語に接するとき、あの柔和な相貌の中に、燦然と紙背に徹する二つの目の光

りの恐ろしさを偲ばざるを得ない。坦々たる表現の中に、寸鐵人を刺す強固な意志のあらはれがある。そして、この言葉も、又この様な祖師の語なる故に、尙強いものを感じずには居られない。

七百年の歴史は、人とゞめんとするも、はばむべからざる法の力を以て、今日に流れて來た。然し果して今日この祖師の意志は、どうなのであらうか。私はこの遺跡に立つて慄然とした。

聞けば、上人が流罪になつた小松庄は更に西の方であり、この地は由來記にもある様に松平氏が別に此の地を卜して建てたものであると言ふ。それ故に、残念な事に祖師の遺跡をしのぶすがは何も無い。唯あるは、その徳の偉大を讀へる如き、歴史豊かな七堂伽藍のみである。

その日は丁度月遅れの雛祭であるとか。美しい壽司の馳走を受け、住持僧上の靜かな物語りに耳を傾ける事時余、次の仕事の時間迫るにせきたてられ乍ら、別れを惜しみつゝ山門を出たのは晝少し過ぎであつた。

池畔の櫻も漸く薄赤くふくらみ、春遠からじの感を與へて居た。祖師の徳を讀へるが如くに。

りもせず、消えはてもせず、低く、高く夕闇に漂うもあわれである。

まざまざといいますが如き觀察

妻の心づくしなるお飾りに、きうりやなすの馬が待ち、冷そゝめんが涼し氣に盛られ、生前兩親の好物が、供えられる。

迎え火もやがて消え、佛前に家内揃い新しい香華を手向け、燈明に火を點じ、チーンとしみ入るように鉦が鳴れば

靈棚の奥なつかしや親の顔

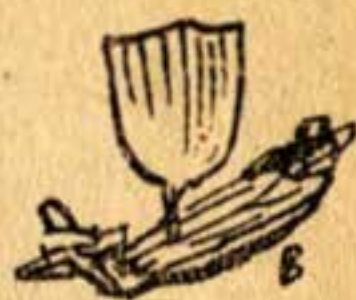
氣のせいとか、小暗いその片隅に在りし日の溫顔がほのかに浮ぶ。

「何はなくとも、せめてこうして家内一同、無事に揃つた姿を御馳走に、ゆつくり召上がつて下さい」

と念ずる心には

叱られた事も戀しき魂祭

せめて夢になりと、なつかしい姿を見、その胸に再び甘えかかつてみたい、幼な兒の思いが湧く。樹靜かならんと欲すれど風やまず子養わんと欲すれども親いまさず住いて來らざるものは年なり、再び見るべからざるものは親なり。



# 香物語

竹 中 信 常

願我身淨如香爐 願我心如智慧火  
念々焚燒戒定香 供養十方三世佛

誰れも知る、これは淨土宗勤行式の第一番目の偈である。「願わくば我が身淨きこと香爐の如く、願わくば我が心智慧火の如く、念々に戒定の香を焚燒して、十方の三世に供養したてまつらん」と讀まれる。

その意味は、自分の身心を清淨無垢に清めた上で、諸佛の御供養をするということである。ところで、自らの心身の清淨なることを香爐の如く、智慧火の如く、といつてゐる。香爐の灰は香の灰がたまつて出来た清い灰である。また、火は凡ゆる不淨なものを燒き盡して清める。よくみることだが、香爐の中にマッチの燃えさしを捨てたり、半年もそのままにして灰がコチコチに固まつてしまつてゐたのでは、「香爐の如く清淨である」とはいえない。火鉢の灰のきれいな家は榮えるといわれるが、全くその通りで、一事が萬事、家全體がきれいになつてゐる證據である。

知人の告別式に御參列すると、お焼香をすすめられる。お墓やお佛壇にお参りする時はお線香を立てる。何といつても佛教では香が用いられる。香がないと佛教の儀式はさしつかえるといつてもいいくらいである。

それなら、どうしてこんなに香が使われるのだろうか。誰れによらず、芳い匂いをかけばよい氣持になる。すれちがつた婦人の身邊から、ふくいくたる匂いを感じれば、何だか美人に會つたような氣にもなる。又、名將は戦場に出るに臨んで、かぶとに香を焚き込んだという。萬一討死して首をとられても、みぐるしくなくようにとの奥床しい心得からである。香は身心をさわやかな香りを以つて包んでくれる。尊い御佛の前に參ずるのに、汗くさい體では勿體ない。特に印度のような熱い國では汗を澤山かくために、佛前に出でる身だしなみが大切である。だから印度では大乘比丘の十八物として僧侶たるものが是非持たねばならぬ十八の持物の中に「香爐」が入れられてゐる。佛につかえる僧として、常に香爐を身につけて清淨潔白に身心を保たねばならないわけである。

香は梵語で乾陀（ガンダー）といわれ、その種類極めて多い。沈水香又は栴檀香、白檀香、紫檀香、沙羅羅香、天木香等は堅香といつて、香木の細片を用い。そのほか色々の花粉を集めて練り丸めたり、麝香といつてジャコウ猫からとつたものもある。また香にはその使い方によつて二通りある。塗香は身體に塗るもので、これには香水、香油、香菜の別である。次には焼いてその香りを立たせるものに、丸香、末香、練香、線香等がある。そして香を焼くことを焼香又は捻香といい、普通一般に行われているものである。

塗香の方は、普通の人がやるのは、香水をつけることである。現代では婦人の身だしなみとして、デパートの化粧品賣場には様々の種類の香水が除列されていて、若い女性の心をまどわせている。佛數の儀式で、眞中に坐つて導師が、法要を開始するに當つて身を清めるために塗香することがあるが、余程の大法要の時に限るようである。

材料や、使い方の上から區別する外に、佛教の教理を香の名に當てて、戒香、聞香、施香の三つとしたり、戒香、定香、慧香、解脫香、解脫知見香の五つにしたりする。私共がふつうお焼香をする際に、一つまみづゝ三回するのだが、これなども、佛教で最も重んぜられている。戒・定・慧の三學をかたちどつたものである。戒は佛數往として守らねばならぬ色々のいましめ、定は靜かに坐つて反省内容をする事、慧は様々の教理を學ぶための眞實の知慧のことで、このどれ一つを缺いても、本當の意味の佛數往とはいへぬ。だ

から常にこのことに心を留め、焼香する場合にも、まづ戒を守り、定を行い、慧をみがくことを佛様に御約束する意味で三度する。又お線香を立てるのも、一本線香は死んだ人に丈けするものだとして、二本又は三本立てるが、これまた、戒・定の二つが、戒・定・慧の三つをかたどつたものといわれる。お通夜などに行つた時は、一本線香を立てるが、そうでない時は二本か三本にしないと、氣にする人は嫌がるから、心得ておくといひ。

香は、無論その香りが生命である。その香りを起こすには水に溶かしたり、焼いて煙を立てたりするわけであるが、その中でも焼く方即ち煙香には極めて深い意味がある。

まづ第一は焼くということである。よく世間では「きれいさつぱり灰にする」という。焼いてしまふのが一番清淨である。氏神様のお札なども古くなつたのは焼いてしまふ。灰にすれば汚れることがないからである。古來火で焼いて清めるといふことは各方面で行われている。焼けばばいきんが死ぬなどといつた衛生觀念が生まれる以前から、人々は此方法を知つていた。むしろそれは宗教的なしきたりとして、古くは神に捧げるいけにえを焼き、現在中國では紙錢とか紅紙黄紙を焼いて入祖祭りをしている。神様は焼いて清められたもののみをうけ入れられるのである。ここにものを焼くというところが、宗教的に重要視される原因がある。

次には焼くときにのぼる煙りである。煙は天にのぼる。それとともに、捧げた供え物を天に在す神に届く。煙こそ、天上の神と地上

の人間とを結ぶもの、人間の願いを神に伝えるものと考えられる。このような考え方は、一方では、屍體を焼いたその煙にのつて、亡魂が天にのぼるとの考えが、特に古代インドで盛んであつて、それが佛教と共に、中國や日本に傳わつて、今日みるような火葬の風習が弘く行われるようになったともいわれる。

香から大部脱線したが、話をもとに戻して、香を焼くことに色々という意味があるが、その中でも佛教徒として忘れてならぬことは、香の供養ということである。法華經に供養の種類を「革・香・瓔珞・末香・塗香・燒香……」等とし、無量壽經卷下に「懸繪・燃燈・散華・燒香」をあげている。いづれも佛様への御供養である。そしてこのような供養によつて得る功德はというのに、大日經疏卷八に

「燒香はこれ遍至法界の義なり。天の樹王の開敷する時、香氣の逆風順風に自然に遍布するが如く、菩提の香もまたしかり、隨つて一の功德は即ち懸火の爲に焚かれ、解脱の風に吹かれ、悲願力に隨い、自在に轉じて普く一切に薫す……」と書かれ、燒香すればそのよい香りがあたりにひろまると共に、自らも悟りの道に至ることが出来るという。まことに廣大な功德を持つていのである。

吾國には古く香會（色々の香を焚いてその香りをかいで香を當てる競技）香道（香を一室の作法に従つて焚いて楽しむ道、禪家で多く行われた）等香に關する色々の行事やしきたりがある。

又、弔葬のくやみに、香奠として志しの金錢を供えるのが、現今

一般に行われているところだが、これはもと香をそなえて、弔意を表わしたもので、奠はまつるともよむのである。それが時代が經つにつれて、香の代りに金錢を包むようになったので、従つて、正しくは香錢と書くべきであるが、錢の字を嫌つて、香資・香財・香儀・香料とも書くようになったのである。

朝・夕、御先祖の御位牌を飾るお佛壇に、數本の線香を立てて、心をこめて冥福を祈り且つ家運の隆榮を念ずるわれわれの日常の生活に始まつて、身にふりかける香水、部屋を清めるために焚く一炷の香、さては弔問の席に至心に故人を忍んでつまむ抹香等々、私達の生活にとつて、香は大切な役割を演じていのである。

▽餌を與へすぎたら藝を覚えぬ。餌を與へなくてはなつかぬ。餌は入用なものだが、本當に餌を使つてはいかぬ。

▽結果を苦にスルのは、まだ本當に爲し切つてないからだ。

▽愛するが故に別れる——別れて永遠に彼の爲めに蔭武者となれ。

▽「らしく」なつた上に、「らしさ」が抜けて、「らしく」無くなつたのが上乘。

（中野刺子）

## 吉田絃二郎作

## 戯曲 京の時雨 (2)

前號まで……高倉天皇の御代のこと。遠耳のきくので一名耳四郎と呼ばれる盜賊天野四郎は、手下と共に京近くの山中に棲み掠奪を恣にしていた。その伴つてゐる妻阿方に以前から心をよせていた津の三郎は、彼等の隠家をさがし求めては阿方に未練のうらみ言を云うのであつた。その度に四郎に指をかみきられても容易に執念は果てるとも見えない。

さてある時、四郎は、京黒谷に於て、法然上人が、念佛の教を開き、聴かんとして集つた人々に話しておられるのを遠く聞いた。上人に教を求めた彼は「罪業深きも本願の船にのり一念發起せば救はる」と教へられ、その名も教阿彌陀佛と名を頂いて、その弟子となつた。

だが三郎は……

## 第三場

さらに三年の月日が経つた晩秋の夜。京からすこし離れた或る村はづれのさびしい道。

「S.E  
……虫が鳴いてゐる……」

(阿万のうしろから幽霊のやうに衰へた津の三郎が歩いてゐる)

三郎 これ、阿万、そのやうに逃げずとも一度くらゐわしと一緒に歩いてくれないぢやないか今夜こゝでお前に逢つたのもよく／＼の縁だ。

阿万 三郎さん、まだあなたは執念ぶかくあたしのあとを追ひかけるのですか。

三郎 津の三郎は死ぬまでお前を追ひかける、お前たちはこの年月の間に幾度棲み家を變へたと思ふ、みんなおれが恐いからだ、おれはそれでも鹿を追ふ狩犬のやうに、お前たちの隠れ家をさがし出した。そのたんびに、

阿万 もう、その話はよして下さい。(氣味悪がり)思ひ出しても

ぞつとします。

三 郎 わしはそのたんびに、四郎にこの指を一本づゝ切られた。

阿 万 三郎さん、そんな氣味の悪い話、もう止しにして、あたし

(逃げ出さうとしてもがく)

三 郎 まあ、逃げないですこし、この三郎がいふことを聴いてく

れ、おう月が出た。お前の顔をしみじみと月の光りに見た

のは、もう幾年ぶりだろう。わしにお前の美しい顔を見せ

てくれ、お前は泣いてゐるな。

阿 万 泣いてなんかゝるません。だけど、あなたのそのおやつれに

なつたお姿を見ては、いかに冷たいあたしの胸でも

三 郎 阿万、お前のあたたかい胸に、わしのこの冷たく残つた、

ただ一本の指をあたゝめてくれ。

阿 万 いけません、いけません。あつちへ行つてください、あた

しは恐くて體がふるへてゐます。

三 郎 お前だつて、あのころはこの指をしつかりあたゝめてくれ

たこともあつたではないか。

阿 万 あなたはその手の繻帶を取つてはいけません。あたしはあ

なたの指を見るのが恐い。

三 郎 恐いといつても、指はもうたゞ一本しきや残つてはゐない。

阿 万 あつあなたは、その繻帶をお取りになつてはいけません。

三 郎 阿万、この切られた指の一本一本が、どれほどお前の名を

呼んでゐるか、お前にはその聲が聞えないのか。

阿 万 あたしが悪うございました。あなたのお心を何でにくいな

どと思ひませう、だが、今はどうすることもできません、

あたしを可哀想だと思つて、このまま別れて行つて下さ

い。

三 郎 別れて行つてくれといふのか、なぜいつしよに死んでくれ

とはいはないのか。

阿 万 あたしにそんなことができないことはわかり切つてゐるぢ

やありませんか。

三 郎 お前は今夜こゝでわしに逢つたのは、いつしよに死ぬとい

ふ因縁事だとは思はぬか。いつしよに死んでくれ。

阿 万 いやです、いやです、何をなさるのです。

三 郎 阿万、死んでくれ。

阿 万 いけません。いけません。(と、三郎の手を突き放す。三

郎ははずみを食つて倒れる)

三 郎 お前はわしを突きとばしたな。

阿 万 ごめんなさい、けがはしませんか、ひどいことをしました

ね、起き上がれませんか、どれ(と、近づかんとするに、

人の歩み来るけはひにおどろき)誰れか来るわ、三郎さん

すみません、あたし行きますよ、お達者でねえ。

(ちよつと泣き、駈け入る)

## 第四場

(間)

「S.E

虫の音」

(以前の天野四郎が子分二人登場)

子分一 えつ、氣味が悪い。そこに幽霊のやうな男がしやがんでゐ

る誰れだらう。

子分二 見たやうな男ぢやないか。

子分一 あつ、あの男だ。頭のところよくやつて來た男だ、津の三郎だ。

子分二 さうすると今逃げるやうに立つて行つた女があつたが、あれは姐さんだつたかなあ。

子分一 ちげえねえ、姐さんだつたよ ううむ。(思ひ入れ)

子分二 あの男、妙なことをしてゐるぞ。

子分一 月の光りに手をかざして、無くなつた指をかぞへてゐるぞ

京を外れた宿場の、居酒屋を兼ねたる旅籠屋。蔭にて酒を飲み歌をうたひ、手をたゞく男たちの聲きこゆ。歌は間ののろい古風なもの。

博 勞 (馬を曳いて) おかみさん。かいばはすんだで、わしはあつ

ちの部屋で寝るからな、この馬はあづけたぞ。(馬のいなな  
く聲) どう、どう、どう。

宿の女房 博勞さん、馬のことなら安心しておやすみやす。

博 勞 頼んだぞ。奥州馬をやつと手に入れて、これから、さる大名に賣りつけようといふのだからな。

宿の女房 既の貫拔には錠をかけて置きやすから、馬盗人の氣づか  
いはございません。(馬いなくな)

(教阿彌陀佛少し酒に酔ひたる態にて登場)

教阿彌 えゝい、……

宿屋の女房 これは教阿彌さま、よいご機嫌で。

教阿彌 これはおかみさんか。よい馬ぢやのう。ところで今夜は久しぶりでお酒をいただいたので、これから蟻峨までかへる

のも難儀ぢや、一つどこぞ部屋が空いてゐたら、泊めて貰はうか。

宿屋の女房　いつもの離れがようございませう。

教阿彌　案内はいらぬ。それでは離れにいつて寝ることゝしよう。

(間)

「S.E

馬の足掻き、いななき」

この部屋は落ちつきたい部屋だ。先づこの壁に阿彌陀さまの御像を懸け、お念佛申してから寝ることにしよう。(念佛を唱へる) 今日もこれで、安樂淨土の一日を送らせていただいた。これもみな阿彌陀様のおかげぢや。何時であつたらう。黒谷のお上人さまの御法談を聴聞さしていただいた日から、わしもあの恐ろしい血の池に浸されてゐたこの手に、ありがたい珠數をかけて、かうやつてお念佛申すことができるとは、何といふ仕合せ者ぢや。あれ以來わしは道を歩いてゐても、一疋の蟻も踏み殺さぬやうにしてをる。昔の耳四郎時代のことを思へばわれながら身の毛がよだつ、あの恐ろしい罪業を重ねたわしがかうやつて生きの

びてをるのも、彌陀のお慈悲ぢや、ありがたい、ありがたい。南無阿彌陀佛、々々々々々……ありがたいといへば今夜は見も知らぬ旅の二人の衆に、こゝの居酒屋で久しぶりの馳走になつたが。

第五場

旅の男一　まあ、いいではございせんか、もう一杯。わたし共は

若狭からまいつた田舎者として酒のすゝめやうも存じませぬが。

旅の男二　大きい杯がよろしいでせう。

教阿彌　いや、ちかごろかやうに結構な酒をいたゞいたことはございせん。

旅の男一　難波に立ち寄り、すこしばかり田舎への土産にと、馬につけてまいつたのでございます。

教阿彌　左様でございますか。天の美祿とはかやうな酒を申したものでございませう。もうすつかり酔つぱらいました。

旅の男一　どんなにお酔ひなされても、わたくし共が介抱いたしますから、もう一つ、この大盃で召し上れ。

教阿彌　やあ、これはかたじけない。ハッハッハッ……

## 第六場

教阿彌 と、いふわけで旅の衆二人に近ごろめづらしい難波の酒を

したゝかに振舞はれた。これも彌陀のお慈悲ぢや、南無阿彌陀佛々々々々……ありがたい、ありがたい。(こほろぎが鳴く) 酒に足を取られてひよろひよろするわ、どつこいしよ。どれ、寝るとするか。やつ、こほろぎ奴が枕にとまつて鳴いてをる。これこほろぎ、そこらにまごまごしてわしに踏まれるな。壁の阿彌陀さまの近くにとまつて鳴け。しつしつ(とこほろぎを壁の方へ追ひやり) おう、そこらで夜つびて鳴きををれ。わしは勿體ないが眠りながらお念佛を申すぞ。南無阿彌陀佛、々々々々々々々々々々……

(次第に念佛の聲が低くなり、また時々高くなる。)

旅の男一、二、すなはち和藤武右衛門と庄司二人、

刀を提げ、障子の外に立ち)

庄司 (やゝ低い聲で) 教阿彌さん、教阿彌さん。

(室の中から念佛だけが聞える)

武左衛門 教阿彌さん。

庄司 眠つてをらるゝやうだ。教阿彌さん。

武右衛門 叔父さん大丈夫です。すつかり酔つてゐますから。(障子

を開けて室の内に入る。兩人太刀を抜き、教阿彌を一刀の下へと振りかざす。教阿彌、眠りたるまゝ念佛を唱へる)

庄司 武右衛門、お前から斬れ。

武右衛門 叔父さんから斬つて下さい。

庄司 えいッ！(と太刀をかざし) これはいかなこと、おれは眼がくらみそうだ、南無阿彌陀佛々々々々々々。

武右衛門 わたくしとてもこの太刀は打ちおろせません。

庄司 心の迷ひだ。えいッ(とふたたび太刀をふりかざす) 武右衛門これは何うしたことぢや。太刀をふりかざす刹那に、教阿彌どのの全身から、燦然たる光りを放ち、阿彌陀さまの御姿が現はれ給ふぞ。

武右衛門 武右衛門が眼にも、教阿彌どのゝ姿は消えて、まこと金色の阿彌陀さまの尊像が。

庄司 勿體ない、すんでのことに阿彌陀さまに斬りつけるところであつた。(兩人太刀を捨て教阿彌を拜む)

兩人 無南阿彌陀佛々々々々々々、々々々々々々。

教阿彌 南無阿彌陀佛々々々々々々。

兩人 お眼がさめましたか。

教阿彌 お前さま方は何でわたしを拜みなさるのぢや。おう、お前

さま方は先刻難波の酒を振舞うて下された若狭の旅の衆ではございませぬか。

庄司 實は先刻若狭の者と申したのは偽り。

武右衛門 無理に酒をおすゝめ致したのも、お前さまを酔ひつづした上で、親の仇とねらう天野四郎に一太刀うらみたい一念からのことでござつた。

教阿彌 ではお前さま方は。

武右衛門 まことは丹波の國は荒部の卿、和藤丹治左衛門が一子、

武右衛門。

庄司 丹治左衛門の弟庄司。お前さまは天野四郎といふことを知つての上の態たらく、南無阿彌陀佛々々々々々々。

教阿彌 お察しの通り、この教阿彌こそ、大盗人の天野四郎に相違ございませぬ。思ふ存分になさい。したが、何ゆえに太刀を捨て、天野四郎を拜みなさるか？

武右衛門 親の仇思ひ知れと振り上ぐる太刀の下に眠つてをらるるお前さまを見ますれば、お前さまではなうて、

庄司 黄金の光りまばゆき阿彌陀佛。もつたいなさに太刀執る手もしびれました。

教阿彌 あゝ、阿彌陀さまがわたくしの身替りにお立ちなされましたか。

庄司 いや、教阿彌どの御自身が阿彌陀さまになられました。

教阿彌 大悪人の天野四郎が、阿彌陀さまのお姿になりませうとは勿體なや、南無阿彌陀佛々々々々々々。

庄司 わたくしどもは今はじめてお前さまに現身の阿彌陀さまを拜みました。

武右衛門 教阿彌どの、お前さまこそまことの阿彌陀さまぢや、南無阿彌陀佛々々々々々々。

庄司 南無阿彌陀佛々々々々々々。

教阿彌 勿體ない勿體ない、南無阿彌陀佛々々々々々々。

(つづく)

## 不思議

竹内栖鳳の畫室を訪れた孫が、ちよこくと氏の作品の前にいつて、ちつと畫を見つめていた。なんの畫か解からないらしい。そこで傍の人が教えてやろうとすると、氏は制していつた。

「今この子は不思議を起し始めてゐる。不思議を起すといふことは人間では一番大切なことや。暫く考へさせておくがよろしい。行届いた先生は結構なことだけれども、餘り行届いた先生に教へて貰つた生徒は、さて一本立ちになつた時にダメになる。教育といふものはソコのとかが大切なんだらうな……」

## 芝園だより

さい。尙、トラクト、シリーズに

ついでに御意見をどしどしお寄せ

下さるようお願い申し上げます。

◎近來、各地に支部結成の聲が高

い。ありがたいこと。出来るだけ

の便宜をはからいますから、別掲

の支部規定御参照の上、全国的に

設立されんことを希望します。

◎來月より本誌の組織が擴大致し

ます。お楽しみにお待ち下さい。

◎小生、相變らず、氣胸をつゞけ

ておりますが、まあ何とか半人前

位のお手傳いが出来るようになり

ました。お手柔らかに。(竹中)

◎淨土宗の最高學究機關である教

學院では、先頃より、淨土宗教義

の精要を作成すべく關係學者を動

員して作業が始められている。之

は、宗義は勿論、種々の行事に至

るまでを網羅したもので、完成の

曉は貴重なものとなろう。

◎吉田絃二郎先生の例月の隨筆は

京の時雨掲載後、繼續して頂きま

す。

◎獨立後、いろ／＼「占領の落し

子」が批判されてきた。六三制も

その一つ。社會科中心の行き方、

赤坊に大學生的自主研究、澤山な

本をかゝえて苦しむ子、九時間勞

働にくた／＼になる教員等は再考

を要する。其他もろ／＼の「落し

子」のために正確な判斷を誤りが

ちな此際に、不變の信に立つもの

ゝ任は重い。

◎最近密雄先生は大佛七百年祭に

併行して幼稚園を近所に、良智先

生も近く大々的に擴張増築。但

し之は先生の御仕事の片々

◎竹中氏、頓に健康回復、又、本

月十五日には自坊再建の建前。

◎事務所は會員漸増とともに忙し

く、四月來大橋俊雄君、最近では

齋藤昭俊君の應援を得て、元氣百

倍、ただ、大橋氏は、ここ少つと

健康を害しておられるが余快を祈

る。(龍海)

維持會員芳名(敬稱略)

高野 健 一(東京)

眞野 孝 信(京都)

須藤 隆 仙(北海道)

誌上厚く御禮申し上げます。

誌代

會費半々年二百圓、一年四百

圓(共)每號定價三十圓四

圓、前金切次第清算通知申上

げます。確實便利な振替を利

用して下さい。

「淨土」 七月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿七年六月廿五日印刷

昭和廿七年七月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野 正 順

發行人 眞野 正 順

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

電・芝(四三)一三二八

會費部B一〇八〇一四

# 新刊

浄土トラクト

B六、十六頁  
價十圓送八圓

信徒必携

浄土編集部編

信徒としてぜひ之だけは知つておきたい「浄土」の  
みおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・  
其他・佛壇・香・珠數・木魚・おけさ・佛式作法一通  
りを丁寧に説明したもの、迫るお盆施本に是非  
藤井實應著

一枚起請文

宗祖信仰の本質も、新しい思想と深い體驗によつて、  
かんでくたいて説かれた念佛信仰者必読の書

浄土シリーズ

文庫版四頁二圓  
百以上、二百以上、五百以上、  
送、五十部毎八圓

大野法道著

五重の話

藤田寛雅著

お十夜

竹中信常著

お彼岸

前田龍海著

参詣手帖

法然上人鑽仰會

本會代理  
責任取次

## F. F. D. 幻燈機

F. F. D. 株式會社  
東京都港区  
芝田村町三ノ七

.....スライド映寫機(幻燈機).....

◎ミナシキ58型B ¥12,880.送料¥500. ◎マスターS50. B型 ¥11,880. ¥500.

.....スライド(フィルム).....

- |                                         |        |
|-----------------------------------------|--------|
| ◎玉虫の厨子物語—法隆寺にまつはる愛と藝術の悲しい物語             | ¥ 460  |
| ◎早耳のうさ吉—早耳で得意のうさ吉が早耳の爲大失敗               | ¥ 430  |
| ◎おしやかさまシリーズ—全五巻、釋迦の降誕から一生描く             | 各¥ 430 |
| ◎白像の村—戦火に追はれ砂漠をさまよう人々を救う白像              | ¥ 460  |
| ◎二宮尊徳—貧しき農民のため困苦とたたかう尊徳先生               | ¥ 460  |
| ◎アルプスの娘—ヨハンナスピリ作、汚れしらぬ娘ハイジのもの<br>のがたり二巻 | 各¥ 430 |
| ◎ビルマの豎琴(前、後)—文部大臣賞を得たビルマの豎琴のスライド化       | 各¥ 430 |
| ◎母を尋ねて—母を尋ねて三千里、海越へ山越へ少年マルコの話           | ¥ 430  |
| ◎幸福の王子—寶石と金で作られた幸福の王子が人々を助ける            | ¥ 460  |
| ◎白雪姫—美しい白雪姫がさまざまな苦勞が幸せになる               | ¥ 430  |

其他—作品300種、在庫豊富、目錄進呈致します。